慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古版経済書解題 フランシス· プレース著 一千八百二十二年版『人口原理の例証』
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.9 (1936. 9) ,p.1399(141)- 1406(148)
JaLC DOI	10.14991/001.19360901-0141
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360901-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ンディとマルクスの社會主義的學說と對照して資本家的補償說の發展だけをより詳細に述べられるか、或はまた最近の世界恐慌を楔機として英、米、獨、佛に再燃した補償說の否定と肯定の諸論だけをもう少し廣く檢討して讀者に傳へられたならば、一般の讀者はそれに依りでより大なる學問的な興味を誘はれたゞらうと想像せられる。

しかし本書に於ける戸田氏の主觀的意圖は唯だ單に補償說の學說史的檢討にあるのではなく、「元來經濟理論並に學說史の專攻家でなく、社會學の專攻者である氏に於いては、本書の最後に加へられた氏の拔文に述べられてゐるやうに、「思想乃至理論形態が如何に社會と共に推移するか」を探及し、知識社會學に一つの素材を提供せんがために、補償說の發展を檢討するにあつたのである。そしてこの氏の目的からは舊くはリカルドの機械論が、また最近ではレーデラーの見解が氏の興味を甚だしく刺戟したものゝやうである。しかも本書を通讀した後の感想から云へば、果して如何なる程度まで、著者の知識社會學的目的が貫かれてゐるか、稍々心細い感なきを得ない。寧ろ氏の本書に於ける企圖から云へば、リカルドとレーデラーの理論が各々その時代の更らにより詳細な經濟史的背景の序述を以つて理解せられねばならなかつたのではなからうか。そしてその上に適當に他の諸家の補償說の辯護論が批判せられ、またその否定論が適當に評價せらるべきであつたのではなからうか。

以上、私は戸田氏の著作に對して相當忌憚なき希望と苦言を呈したが、氏の著作を機會に、私は此處に吾國の一般讀者に對して補償說に關する學問的關心を大いに促し度いと思ふ。そのためには氏の著作は現在の吾國に於いては何人にも一讀せられて然るべきものゝ一つである。また氏は本書の卷末に內外の多數の文獻を擧げて居られるが、それは單に補償說に限らず、一般に技術の社會科學的研究に興味を有するものに取つても亦多少の價値なしとしない。

（昭和十一年八月十七日稿）

古版經濟書解題

フランシス・プレース著一千八百二十二年版『人口原理の例證』

高橋誠一郎

マルサスの說いた人口增加に對する「倫理的抑制」は結婚の延期に在るものであつて、決して新マルサス主義者の如く產兒の制限を指すものではなかつた。「新マルサス主義」若しくは「產兒制限」なる語は彼れの唱道する總べてのものとは全然相違する意味を有するに至れるものであつて、苟もマルサスとの關係に於いて此の語を使用するは甚しく誤解を生ぜしむるの虞れあるものである。結婚の延期が產兒の制限である限りに於いての外は、マルサスは之れを唱道することがなかつた。而して現時に於いては、十中の九まで、產兒の制限は結婚の延期とは著しく相違せるものを意味するのである。而もマルサス自身が唱道することを肯じなかつた結婚後に於ける姙娠防止は彼れの生前既に他の論者によつて主張せられた。マルサスの人口原理を確く信じて疑はざるものではあつたが、而も早婚によつて不良靑年たることを免れ、而して大家族を支持しなければならなかつたが爲めに甚しき窮迫に陷らしめられたフランシス・プレース（Francis Place）は夙にマルサスの主張を變更するの必要を認めたのである。彼れが未だ十七歲に達せざるエリザベス・チャッド（Elizabeth Chadd）と結婚したのは彼れが十九歲四ケ月を數へたに過ぎない

一千七百九十一年三月のことであつた。（Graham Wallas, The Life of Francis Place. 1771-1854, 1918, p. 5, G. Talbot Griffith, Population Problems of the Age of Malthus, 1926, p. 95.）。

一千八百十七年其の業務を長男に讓つたプレースは一千八百二十二年倫敦に於て『人口原理の例證』（Illustrations and Proofs of the Principle of Population: including an examination of the Proposed Remedies of Mr. Malthus, and a reply to the Objections of Mr. Godwin and others.）を公にして其の意見を表明した。本書はゴッドウィンの『人口論』（Of Population. An Enquiry concerning the Power of Increase in the Numbers of Mankind, being an answer to Mr. Malthus's Essay on that subject, 1820.）並びにマルサスの『人口論』を檢討せる成果である。（ibid., p. vii.）。

彼れは第一章に於て、マルサスの『人口論』とゴッドウィンのマルサスに對する第一の回答たる Thoughts occasioned by the Perusal of Dr. Parr's Spital Sermon, preached at Christ Church, April 15, 1800; being a Reply to the Attacks of Dr. Parr, Mr. Mackintosh, the Author of the Essay on Population, and others, 1801. 及び其の第二の回答たる前掲『人口論』に就て述べ、第二章及び第三章に於て瑞典及び北米合衆國の人口に關する兩者の意見を檢討し、第四章に於て、ゴッドウィンの『人口論』第二編に挿入せられたデーヴィッド・ブース（David Booth）の Dissertation on the Ratios of Increase in Population, and in the Means of Subsistence. (Godwin, Of Population, op. cit., pp. 243-288.) を論じ、第五章に於て古代民族の間に於ける人口を取扱ひ、第五章に至つて「人類の數が食料の供給せらるゝよりも速かに增加するを防止するの方法」に就いて述べ、先づ第一に斯くの如き方法に關するマルサス及びゴッドウィンの意見を叙して、「マルサス氏は職なき貧民に食ふの權利を拒んだが、而

ILLUSTRATIONS AND PROOFS

OF THE

PRINCIPLE OF POPULATION:

INCLUDING

AN EXAMINATION OF THE

PROPOSED REMEDIES OF MR. MALTHUS,

AND A REPLY TO THE

OBJECTIONS OF MR. GODWIN

AND OTHERS.

BY FRANCIS PLACE.

It to this day remains a problem, whether the number of our species can be increased.
GODWIN, p. 115.

LONDON:

PRINTED FOR

LONGMAN, HURST, REES, ORME, AND BROWN,

PATERNOSTER-ROW.

1822.

も彼れは職なき富者に此の權利を許した」と做し、(ibid., p. 137.)、次いで食料よりも急速なる人民の増加を防止するの手段に關する英國民の狀態に就いて論じ、「マルサス氏の如き人々は正しく勞作民を判斷するの機會を有したることなく、彼れ自身の意見、彼れの生活上の地位、彼れの職業其の者及び彼れ等の隔意と疑念とは悉く相合して彼れを妨げた」と說き(ibid., p. 155.)、第三に本問題に關する著者自身の意見を表明してゐる。彼れ曰く、「就中健康に取つて有害なるか、若しくは女性のつゝましさを破ることなくして姙娠を防止するが如き豫防法を利用することが結婚せる人々に取つて恥づ可きでないと言ふことが一度び明かに會得せられたとするならば、充分なる防止は生存の資以上に出でたる人口の増加に對して直ちに與へらるゝを得可きであらう、罪惡及び窮乏は著しく大なる範圍まで社會から除去せらるゝを得可きであらう、而してマルサス氏、ゴッドウィン氏及びあらゆる博愛家の目的は、人口の大多數に於ける幸福、知識及び德行の増加によつて助成せらるゝを得可きであらう」と。(ibid., p. 165.)。

彼れに從へば、勞作民の狀態を改善せんとする眞の願望が當さに存す可きの所に存するならば、三個のものが爲されなければならぬ。第一は、其の賃銀を増加せんとする勞作者の結合に關する總べての法律の撤回である。勞作者と其の雇主とを抑制して、他の契約の行はるゝと等しく、彼れ等の意のまゝに其の契約を行はしめざる充分なる理由は何等是れまでに與へられて居らず、又與へらるゝを得ない。第二は移住を抑制しつゝある法律の撤回である。是れ等の法律は悉く直ちに撤回せらるゝを得可きであらう。第三は貿易、商業及び製造業に關する總べての制限的法規、而して特に穀法を能ふ限り急速に撤回す可きことである。然しながら、彼れを以つて觀れば、是れ等の意見中の後のものが充分に宣言せられ得るに先立つて、富者は提案と提案者の二者に對して干戈を執つて立つことが豫期せられ得るであらう。然しながら、斯くの如きはそが富者に依賴する限りに於いては、意圖せられたる望ましい狀態から吾人が如何に遙かに遠く隔つてゐるかを立證するに過ぎざる可きであらう。而も富者が斯くの如き針路を採るの意がないならば、彼れ等は誰れよりも先づ貧者の行爲と救貧稅の壓迫とを愁訴するを廢す可きである。(ibid., pp. 171-172.)。

プレースに取つては、マルサスが姙娠を防止するの正否を論ずることを避けた觀があるのは、彼れ若しくはあらゆる理性ある人が這般の慣行に對して有し得る嫌惡に基くよりも、寧ろ他人の偏見に遭遇することあるを恐るゝの念に驅られたものと想像せられ得る所多きものであつて、彼れは其の著の終末に近づくに及んで、彼れの救濟策のの總べてを結婚延期の一に歸せしめたのであるが、而も彼れは終始其の效力を疑ひ、而して彼れは之れに信賴するを懸念するの觀があつたのである。(ibid., p. 173.)。然しながら、プレースを以つてすれば、今は當さに過多、不幸、悲慘、且つ著しく不德なる人口の原因並びに這般の過多を防止するの手段を眞に會得せる者が須らく明白に、自由に、あからさまに、又、大膽に其の手段を指摘す可き秋である。(ibid., pp. 173-174.)。「初めに於いては如何に嫌惡す可きの觀があるとしても、一定の手段を提唱し若しくは發達せしむることを回避するは馬鹿げたことである。吾人は單に吾人が一の罪惡を除去するに際して更らに重大なる他の罪惡を導入せざることを注意しなければならぬだけである。罪惡を悉く除去せんと期する者は夢想家である。又、彼れが遂行せらるゝこと不可能なるものを遂行する能はざるが故に、坐して、其の力の中に存する善事を爲すことを差控ふる者は癡呆である」。(ibid., p. 174.)。

マルサス曰く、倫理的抑制の義務を勸奬するに努むるに由つて、吾人は性に關する罪惡の量を増加することある可きであると。而も彼れは語を續けて言ふ、「然しながら、余は確かに、性に關する諸罪惡が倫理問題に於いて考察せらる可き唯一の罪惡であるとも、又、是れ等のものが人間の品性に取つて最大且つ最下劣なる罪惡であるとすら

も思惟することを得ない。是れ等のものが何處かに不幸を生ずることなくして犯され得ることは極めて稀有であるか、若しくは斷じてないのであつて、從つて又、常に强く非難せらる可きである。而も、其の結果が猶ほ一層有毒なる他の罪惡が存し、又、結婚を制するよりも更らに確實に倫理的犯行に導く他の事態が存する。固より童貞の破棄に對する誘惑は力强いものであらうが、余は是れ等のものが連續せる困苦より生じつゝある誘惑に比すれば無力であると思惟せんとする。余は婦人の大なる部類及び多數の男子は彼れ等の生涯の著しい部分を童貞の提に背くことなくして過すことを毫も疑はない。然しながら、品性の大なる倫理的惡化なくして、みすぼらしく且つ望の絶えた貧困の峻嚴なる試練、若しくは長きに亙れる窮境の其れをすら通り拔ける者を看出すことは極めて稀有なる可きを信ずる」と。(T. R. Malthus, An Essay on the Principle of Population; 5th ed., vol. iii, 1817, pp. 117-119.)。

而もプレースを以つて觀れば、總べての者が、行狀の端正及び勤勉の相應なる分擔によつて、貧者の家族中に存するものであつて論議せらるゝこと多きも、而も其の境遇が彼れ等を妨げて幾分長く繼續せる期間に亙つて是れ等の害惡を目擊することをも、又、是れ等のものを感知することをも得せしめざる者の想像によつてすら充分に會得せらるゝことを得ない悲慘なる貧困の增加せられた罪惡と墮落とから彼れ等を免れしむ可しと做す至當の希望を以つて、若い間に結婚することが出來たとするならば、亂交を減ずる最有效なる方法は結婚である。夫婦が有せんことを欲するよりも、多數の子女を產むことを妨ぐるの手段が採られたならば、又、人口の勞働部分が斯くの如くして勞働に對する需要以下に保たれ得るならば、賃銀は騰貴して總べての者に對して安樂なる生活の資を給す可く、而して總べての者は結婚す可きである。結婚は斯くの如き事情の下に於いては、總べての狀態の中で抽んでて最も幸福なるものであり、そは又、最も有德なるものであり、從つて又全社會に取つて最も有利なるものである。(ibid., pp. 175-177.)。洵にプレースに從へば、人民が食ふの權利を有せざることを彼れ等に說明するは不可能であつて、彼れ等は彼れ等が正しき手段を用ふるならば、其の食ふ可きものを有し得ることを敎へられなければならぬ。

次いでプレースは此の書の第七章に於いて英國の人口、第八章に於いて英國に於ける死亡率の減少、第九章に於いて人民の福祉に資する底の資本の蓄積を論じ、第十章に於いて結論として經濟學に對するゴッドウィンの謙惡を排して斯學を辯護し、更らに附錄二篇を附加してゐる。

本書出版の後、彼れは絶えずあらゆる機會を利用して新マルサス主義的意見を表明した。彼れは他の人々の僻見と戰ふを辭せざるの態度を示した。ペンサム主義者のインナー・サークルに屬する自餘の人々も彼れと同樣の意見を有せるが如くであるが、而も敢然として輿論の誹謗の矢面に立つの勇氣を有して居つた者は獨り彼れのみであつた。千八百三十一年四月二十四日附プレース宛ペンサムの書翰は個中の消息を傳ふるものがある。(Wallas, op. cit. pp. 81-82.)。ジェームズ・ミルが『大英百科全書』補遺の爲めに執筆せる『植民地』の一項中に於いて（『三田學會雜誌』第三十卷第五號所載拙稿『經濟學者としてのジェームズ・ミル』七頁）、又、其の『經濟學根本義』に於いて述ぶる所は彼れが同樣の意見を抱懷せるの事實を窺知せしむるものがある。(James Mill, Art. on Colonies in the Supplement to the Encyclopædia Britannica, 1824, vol. iii, p. 257; Elements of Political Economy, 1821, pp. 43-44.)。而してジョン・スチュアート・ミル及び其の友人の如き此の一團中の若き人々は熱心に新たなるマルサス主義を受け容れたのである。ジェ・エス・ミルは曰く「マルサスの人口原理が吾人の間に於ける旗印であり、一致點であつたことは、ペンサム特有の如何なる意見にも劣らなかつた。此の偉大なる學說は、元來、人事の無限なる改善の可能性に對する反對論として提唱せられたものであるが、吾人は反對の意味に於いて非常の熱意を以つて之れを

採用したのである。即ち勞働者數の增加の任意的制限を通じて全勞働人口に對して高賃銀を以つて十分なる仕事を確保せしむるによつて這般の改善の可能性を實現する唯一の手段を指示しつゝあるものとしてゞあつた」と。(Autobiography, 1873, p. 105.)。

本書は一千九百三十年ノーマン・イー・ハイムズ（Norman E Himes）によつて複刻版を上梓せられてゐる。茲には一千八百二十二年の原版表題頁を寫眞版として掲げた。

（附記）本書は我が國に於いては先きに『經濟論叢』第二卷第五號『マルサス生誕百五十年記念號』所載神戸正雄氏の『新マルサス主義』中に一言せられ、其の後昭和八年版吉田秀夫氏著『マルサス批判の發展』中に紹介せられてゐる。(其の九七―九頁)。

前號（第三十卷第八號）目次

◎ファッシズムと自由主義　加田哲二
◎本居宣長の社會經濟思想　野村兼太郎
――國學運動の勃興――
◎農業生産の特殊性についての一考察　小池基之
◎英國に於けるスラムとその住民　奥井復太郎
Slums and Slummers, by C. R. A. Martin. London, 1935
◎技術的失業の否定　藤林敬三
―― Machinery, Employment, and Purchasing Power, National Industrial Conference Board Studies, No. 218 R. 2nd. Rev. Ed. 1936. ――
◎Gerhard Colm, Probleme der Finanzsoziologie (Festgabe für F. Tönnies), 1936.　永田清
◎古版經濟書解題　高橋誠一郎
ジョン・ラムジイ・マカラックの一千八百二十四年版『經濟學の發生、進歩、特殊目的及び重要性』並びに一千八百二十五年版『經濟原論』

◎一冊定價金五拾錢
◎半ケ年分金貳圓九拾錢
◎一ケ年分金五圓四拾錢
郵稅金壹錢五厘
郵稅共
◎編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
◎營業に關する用件は發賣元宛
◎原稿締切期日は發行の前月十日限
昭和十一年八月三十一日印刷納本
昭和十一年九月一日發行
毎月一回一日發行
三田學會雜誌
禁轉載
第十三卷第九號
編輯兼發行者　東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内　江田範保
印刷者　東京市赤坂區新町五丁目八十二番地　金子鐵五郎
印刷所　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子活版所
東京市芝區三田二丁目一番地
發賣元　丸善株式會社三田出張所
電話三田(45)一九二六番　一九二七番　一八五二番
振替口座東京一一一八五二番
◎尚ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す
發行所　東京芝三田慶應義塾内　理財學會
振替口座　慶應義塾　芝區三田二ノ二　東京一八二〇四番